



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道の廃娼運動と佐野文子の生涯
Author(s)	福島, 恒雄
Citation	基督教学, 17, 28-31
Issue Date	1982-07-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46413
Type	journal article
File Information	17_28-31.pdf



北海道の廃娼運動と 佐野文子の生涯

福島 恒雄

一、見えなかった婦人解放運動

日本基督教婦人矯風会は一八八六年に設立された。ほぼ一世紀に近い活動を続けている。その機関誌「婦人新報」九十周年記念号に村上信彦氏は「女性史における婦人矯風会の役割と評価」という一文を寄せ、わが国で九十年の歴史をもつ婦人団体のあることは異色の存在である。創立当初から平和、排酒、純潔を三大モットーとして今日まで続けられてきたが、女性史の中でクロージ・アップされるのは純潔の問題――廃娼運動である。これは、明治、大正、昭和を通じて最大の人権闘争であった。としながらも、「だが、廃娼運動がこれまで婦人運動として正しく評価されなかったことも残念ながら事実として認めなければならない」と記している。

北海道の婦人矯風会は全国で三番目に発足したほど歴史があり、果敢な廃娼運動をしてきたのに、歴史研究の

中でほとんど触れられたことはなかった。記録の乏しいこともあろうし、視点に欠けていたこともあって、見えなかった婦人解放運動であり続けたものであろう。

廃娼運動は明治の啓蒙家やキリスト者によって早くから提唱されたが、その中心となって実践してきたのは婦人矯風会と救世軍である。遊郭に売られた婦人を助け出すと共に公娼制度廃止の闘いでもあった。

遊女は旧約聖書のタマルの記事にもあるように有史前からいたものと思われるが、わが国の公娼制度はキリスト教の迫害と奇妙にも一致する。一五八九年秀吉は京都の宣教師を追放した年島原遊郭を公認し、蝦夷に切支丹が迫害を逃れてきた一六一七年に江戸幕府は吉原の遊郭を公認した。それ以来、日本各地に公認の遊郭が設けられ、苦海に身を浸める婦人が多出するようになってきた。

二、北海道の遊郭と廃娼運動

遊女が道内に出現したのは和人の渡来と共に古いと云われるが、公文書としては一八〇五年の松前資料に「料理茶屋に関する触れ書」⁽³⁾がある。茶屋が続出し、酌取女が分不相応の奢りをしないように、又、召しかかえる時、

出所を明らかにするようにとの内容である。箱館には山の上町に遊郭があり、日本脱出の志を抱いて箱館にきた新島襄は異人館と対照的な遊郭に驚き、不快の念を日記に綴っている。北海道医師会史には、箱館医学所をつくるとき、資金が不足しこの遊郭の妓楼積立金を借用し、後の治療代で差し引くこととして最も古い病院をつくった、と記している⁽⁵⁾。

問題は開拓使や道庁が積極的に誘置をすすめた事にある。一八六九年札幌へ本府を置くこととし、二年後に岩村判官は「北海道開拓人夫一万人ほども差しつかわし候については遠隔の儀、自然人夫ら厭倦の意を生じ候も計りがたき候につき、妓楼立置き公然売女免許仕まつり候心得⁽⁶⁾」と、正院（政府）に届けている。この方針は戦前まであまり変わっていない。北海道の開拓はアイヌ民族の人権、囚人の人権を無視して進められてきたと云われるが、婦人の人権も無視して進めた施策であった。

旭川は一八九〇年に開村し一〇年後に町となった。この時、師団が移ってき、曙遊郭が出来た。更に師団の増強と共に中島遊郭増設問題がおこり、中学校が隣接しており、女学校設置場所と近いこともあって猛烈な反対運動が町民に興った。町長をはじめ町会議員の大半も反対

したが、これをつぶそうとして長官は町長の更迭を画策した。町民有志は上京し、国会や内閣に働きかけたが、これを支持したのは矢島矯風会頭やキリスト教徒議員であった。一九〇六年頃のことである。この記録は旭川資料三冊に残されているが、旭川の矯風会やキリスト者の働きは記していない。

三、北海道の婦人矯風会と佐野文子の生涯

北海道と矯風会とは深いつながりをもっている。一八八六年に万国婦人矯風会からミセス・クレメントが代表として来日した時、通訳をしたのは札幌バンドの一人渡瀬寅次郎夫人香芽子であった。創立当初、矢島会頭と共に書記として働いた佐々木豊寿は室蘭に入植したことがある。日本最初の女医となり瀬棚のインマヌエル村の志方之善の妻となった荻野吟子は風俗部長として娼娼運動を進めた人である。戦後、久布白落実会頭と共に売春禁止法成立のため尽くした竹上正子副会頭は札幌出身で留萌矯風会を設立した一人である。一九一七年頃、北海道には函館、室蘭、札幌、旭川、留萌、名寄、野付牛、小樽、滝川、岩見沢、帯広などに支部がおかれ、キリスト教団体では一大勢力となっていた。

旭川の中島遊郭問題が起った時、矯風会支部長であったピアソン夫人や坂本、杉浦、高柳牧師夫人らが中心となつて何度も札幌へ出張し長官に面会を求め廃止運動を進めた。一九一六年に野付牛(北見)二十一年に名寄で、二十四年に室蘭で廃娼運動の闘いをしていたことが婦人新報に散見される。

大正から昭和にかけて果敢に廃娼運動を進めたのは旭川の佐野文子である。「旭川九十年の百人」には「九十年におよぶ長い市史に登場する女性活動家のなかで、この一生を最も美しくそしてだれよりも人間らしく生き抜いたのは廃娼運動に、受刑者の保護更生に、持ちうる限りの全エネルギーを注いだ佐野文子をおいて他にはないだろう……」⁽⁸⁾と記している。文子は一八九三年島根県浜田市に弁護士をしていた水津静世の五女として生れた。両親共熱心なキリスト者で水津は自由民権家でもあった。一九〇九年に旭川の上川病院長をしていた姉夫婦の所に來、小学校の教師となり、十二年に同僚の佐野啓次郎と結婚した。矯風会の運動に関わり、十五年に夫と共に六条教会で受洗した。二十一年に夫がなくなり、矯風会の旭川支部長として廃娼運動に挺身するようになる。遊郭でチラシを配り、逃げてきた婦人をかくまい、

やくざの脅迫にもたじろがないで生命を賭して婦人の人権を守る闘いを続けた。郷土史家村上久吉は

面 死 頻

匕首一閃面死頻 時徴丞相当国難
朝夕警世母之鐘 廢娼防犯尽心身
と、佐野文子小伝に記している⁽⁹⁾。

戦時中、国防婦人会長に選ばれ、東条英機首相の私設秘書となったことがある。戦後は刑余者の更生保護事業に尽くし、一九七八年八九歳でなくなった。市の文化功勞賞をうけているが、矯風会の三大モットーである平和、排酒、純潔を重んじた文子が何故国防婦人会長となり、軍閥と結びついたのか、その信仰、思想の軌跡は今後の課題となるものであろう。

註

- (1) 「婦人新報」は一八八八年に「東京婦人矯風会雑誌」として発刊し、九五年に「婦人報告」と改称した。一九七六年十二月号は創立九十周年記念号で九一五号である。
- (2) 「婦人新報」第三七号に日本全国矯風会一覧表があり、長崎、東京に次いで函館が一八八八年に設立している。
- (3) 松前町史、史料編第一卷六一二頁。
- (4) 函館市史、史料編第一卷八六六頁。新島襄著「函館紀行」

- (5) 「北海道医師会史」二七頁。
(6) 「北海道百年」(上) 七四頁、北海道新聞社刊。
(7) 「北海道旭川町増設遊郭に関する顛末書」「遊廓新設反対同盟
会日誌」「中島遊廓廃止請願関係記事」他各種新聞の論評記
事スグランプ、市図書館保存。
(8) 「郷土の歴史に生きる―旭川九十年の百人」七八頁、北海
タイムス社刊。
(9) 「旭川の人々」二〇七頁、旭川叢書第五卷、村上久吉著。